

FOA-NEWS

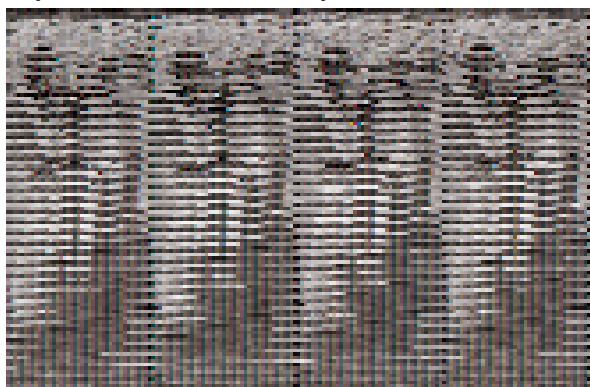
通算第 44 号

2020/1/31

喜入博氏、殿堂入り

監事 田口 眞行

2020 年 1 月 3 日、第 73 回ライスボウルに先だち、アメリカンフットボールの発展に寄与した功績を後世に伝えていくために新たに殿堂入りが決定した 12 名の方々の表彰式が執り行われました。(第 5 回殿堂入り顕彰)



これまでの顕彰者の中で、関東審判部の主な関係者は以下の方々です。

服部慎吾氏(故人): 立教大学のプレーヤーとして活躍され、戦後日本協会理事長を務められました。

安藤信和氏(故人): 同じく立教大学でプレーをされ、戦後の 1954 年、日本アメリカンフットボール審判協会設立時の理事長、また後に日本協会理事長を務められました。

笹田英次氏: 日本大学卒業後、1956 年に関東地区で高校、大学の試合の審判員としての活動を開始され、1954 年の日本アメリカンフットボール審判協会設立、関東審判部副部長として関東審判部の組織化など、長年に渡って関東審判部の活動を推進され、1997 年には日本協会理事長に就任、1999 年 IFAF 設立と同時に IFAF 初代プレジデントになりました。

水田吉春氏(故人): 1954 年に設立された日本アメリカンフットボール審判協会の補佐役を務め、1972 年には関東審判部副部長、そして 1976 年に

は関東審判部部長に推されて就任され審判組織の構築、推進に寄与、1991 年には関東学生アメリカンフットボール連盟理事長に就任され、日本学生協会理事長、日本協会常務理事も務められました。

そして、今回喜入博氏が顕彰され、関東審判部としてかわりの深い方の顕彰が 5 名となりました。本当に嬉しいことです。

表彰式当日、喜入さんにインタビューをさせていただきましたので、その様子をお伝えします。

今回の殿堂入りが決まったことを聞いた時にどのように思われましたか。

びっくりしました。私が受賞に該当するか疑問がありましたが、あとから続く審判関係の方を考え受賞させていただきました。皆様のおかげです、ありがとうございます。

フットボールを始めたきっかけはなんでしょうか。

私の高校時代は昭和 35 年からです。当時東京都にはタッチフットのチームが十数チームあり、その一つに都立烏山工業高校がありました。3 年生になった時にメンバーが足りないということで狩り出されてタッチフットを始めましたがそれがフットボールとの関わりの初めです。そして浪人していた時に西高 OB で烏山工業のコーチをしながら審判部に所属していた小野恵稔さんからチームの面倒をみなさいということでチームのコーチをやり、同時に高校の審判も始めました。また、大学入学後に大学が駒沢公園に近かったので、大学の試合の審判も始めました。当時関東大学リーグ所属チームは 13 だけでした。そして、多くの試合が土曜日開催でしたが土曜日が休みの審判が少なかったため、学生の私に審判が回ってきて大学 4 年間は多くの試合を担当しました。

審判を続けてきて良かったと思うことは何でしょうか。

当時の審判組織は OB が集まり、相談して試合の担当を決めていました。私の大学卒業時には大学のチー

ムは 32 に増加し、事務的作業が増え、私の会社が丸の内にあり櫻井和夫さん、水田吉春さんの会社に近かったため、事務を手伝えということで審判部の運営活動にも加わることとなりました。

当時は体系だった組織的な活動ではなく、相談しながら担当する試合の審判を決めるやり方でした。しかし、学生も社会人も急激にチーム数が増えていき、医科歯科のチームも連盟に加盟を希望している状況で、このままの組織で良いのかということを若いながら櫻井さんや水田さんに相談し、後押しをしてもらいながら組織作りに着手していきました。

審判活動のなかで大変だったことはどのようなことでしょうか。

一つは意識改革です。それまでは自分の都合で審判を担当する試合を決めていましたが、それを「あなたはこの試合の担当です」という現在のスタイルに変えたことです。これは大きな変革であり、櫻井さんや水田さんとともに実施していきました。

また、ルールの理解に対するレベルアップをする必要がありました。当時、日本協会には定期的、組織的に競技規則やその改正を制定し、公式規則書を発行するという仕組みは確立していませんでした。1971年には、ユタ州立大が来日することになり、ルールの同一解釈での試合が実施される必要がありましたが、米軍クリニックに参加すると日本のルールの解釈との差異があり、またNCAAのルールブックを取り寄せたところいろいろな違いが判明しました。

これではいけないということで、いろいろな準備、手順を踏み 1975 年に私としては初めてのルールブックの作成作業をしましたが、一から訳す必要があり、また現在と異なり活字の時代でしたので、とても大変でした。以降、公式規則変更は毎年、公式規則書は 2 年毎の発行の原則が確立されました。国際試合が増えていく中で米国と同じルールでやる必要性を考え、公式規則書を定期的に発行し、制度化したことは良かった



今回殿堂入りした関西学連審判部の東元春夫氏

と思っています。

現在の審判に伝えたいことはどのようなことでしょうか。

私は 45 歳で関東審判部の理事を勇退し、65 歳でルール委員を若い方々にお願いしました。ある程度流れができれば、後輩に任せるとの考えで実行し、自分としては良かったことだと思っています。60 歳になって 1 部リーグの試合は担当から外していただき、2 部、3 部リーグでもレフリーは若い方にやってもらうようお願いしました。現在の執行部の人たちは優秀な方々であり、また現状を一番わかっているのも、自分としてはあまり口を出さないことにしています。後輩の方には、先輩のことを気にしないでどんどん改革を進めていってほしいと思います。

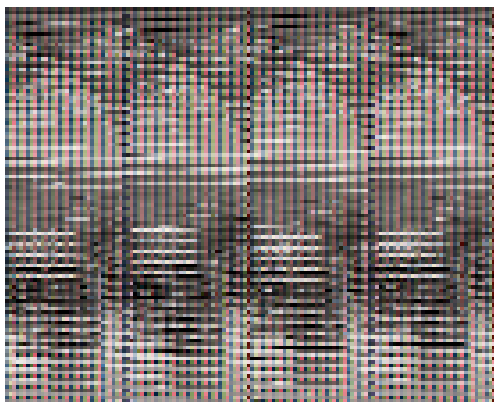


インタビューを受ける喜入氏



国吉会長と 12 名の顕彰者

アメリカンフットボールの殿堂と顕彰



「アメリカンフットボールの殿堂」は、山梨県北杜市清里を開拓された故・ポールラッシュ氏を記念して作られた清泉寮内のポールラッシュ記念館内に、1996年に設立されました。これまで関東審判部は、清泉寮を合宿等で利用しており、その時に殿堂を見学された方も多いと思います。この殿堂の設立は笹田英次氏が推進され、それを水田吉春氏が日本協会理事として維持、拡充をされ、現在もその役割は関東審判部に引き継がれ、殿堂の活動に協力をしています。国内の他のスポーツで殿堂のあるは、野球、サッカー、柔道、剣道などでそう多くありません。アメリカンフットボールの殿堂には、我々の先輩の努力で、競技活動の歴史などが紹介されています。

殿堂には、以下の方々が顕彰されています。

1996年（開設時）：ポールラッシュ氏

2004年8名：松本瀧蔵氏、小川徳治氏、服部慎吾氏、安藤信和氏、羽間平安氏、米田満氏、古川明氏、篠竹幹夫氏

2009年5名：松葉徳三郎氏、保科進氏、井上素行氏、吉川太逸氏、金澤好夫氏、

2016年11名：加納克亮氏、花岡惇氏、三隅珠一氏、樋口廣太郎氏、藤村重美氏、武田建氏、笹田英次氏、水田吉春氏、水野彌一氏、阿部敏彰氏、棚橋寛衛門氏

2018年11名：藤本武氏、井床由夫氏、Chuck Mills氏、高橋治男氏、野村正憲氏、徳永義雄氏、鈴木智之氏、吉岡龍一氏、木谷直行氏、木村洋氏、横溝裕利氏

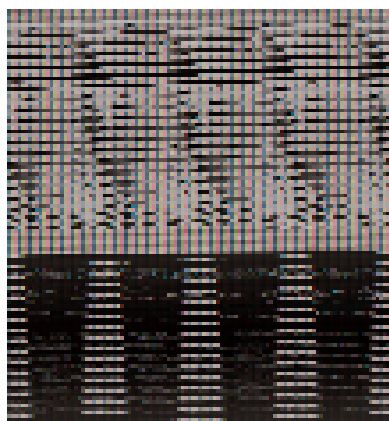
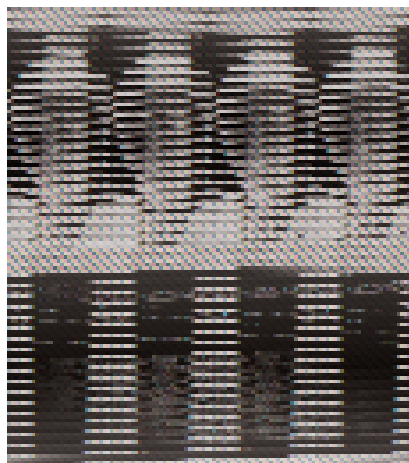
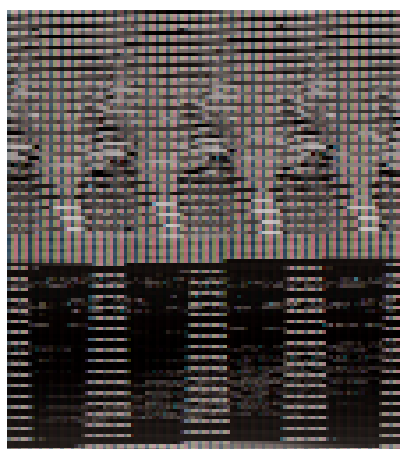
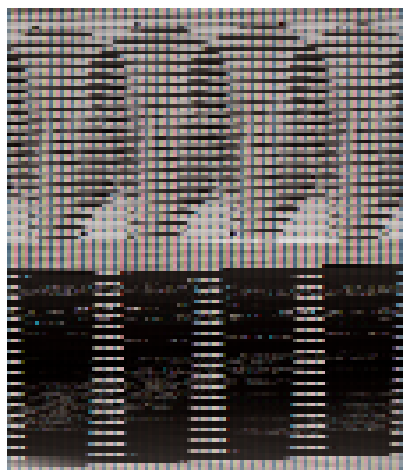
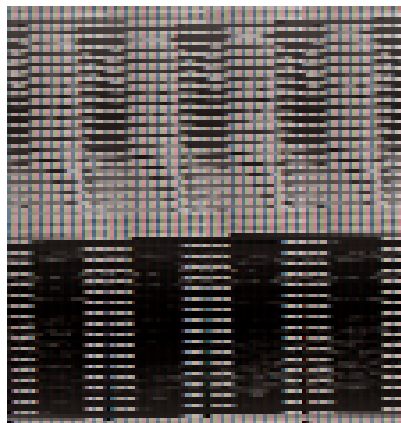
2020年12名 合計48名

戦前、戦後直後は、ご承知の方も多いと思いますが、協会（連盟）の活動と審判活動は、要員面、組織面で密接なかかわりあいがありました。

前記の服部慎吾氏、安藤信和氏、笹田英次氏、水田吉春氏の4名の先輩以外にも、前回までの顕彰者の松本瀧蔵氏、井上素行氏、保科進氏、花岡惇氏、そして藤本武氏の5氏（いずれも故人）が関東地区の審判員として活動され、2004年に発行された関東審判部70年史の巻末の名簿にも名前が掲載されています。顕彰者48名中10名が関東審判部、もしくはその前身の審判組織で活躍されたことになり、改めて関東審判部の歴史の重さと我が国のフットボール界における審判活動の位置づけを認識する次第です。

喜入博氏の経歴

都立烏山工高でタッチフットボールを経験。1965年審判活動開始。1970年より関東審判部の運営に参加。フットボール興隆期で急速に増加する試合数に対し、関東審判部の組織化と拡大に貢献、多くの施策を実行。また教育を重視、ルール知識、適用力の向上を図る。1974年より36年間、競技規則委員会で活動、計16回の公式規則書の編集、発行の実務的責任者を務める。1992年より14年間、競技規則委員長。1989年より15回、NCAAルール委員会に出席。1991年より4年間、審判協会理事長。審判員としてライスボウル14試合等、約1500試合の審判を担当。1999年第1回ワールドカップ3位決定戦の主審を務める。



殿堂の顕彰者プレート